

旅館のおかみに関する民俗学的研究

—マスメディアにおけるイメージ形成と働く女性—

筑波大学院人文社会科学部研究科

歴史・人類学専攻 後藤知美

本研究は、旅館経営者家族の一員として旅館業に従事する女性（おかみ）が、自分や周囲の状況や課せられた役割、感覚、考え方に鑑みつつ、旅館経営体内で自らが果たす業務をどのように選択し、自身の生き方へと調和させていったのかを明らかにするものである。

これまでの女性労働に関する研究は、社会的規範や既存の学問的枠組・理論への批判的検討を重要視する故に、女性の働き方を「主婦」と「働く女性」（雇用労働者）に限定して捉え、その多様な側面を捉えるには至っていない。本研究では、これまでの女性労働に関する先行研究において重視されてこなかった対象、すなわち小経営世帯で家族従業者として働く女性を対象として、社会経済的な変化や経営体・家族成員との関わりといった経営体の外的・内的要因によって女性たちが従事する労働がいかに関係され、その中で彼女たちが自分たちの働き方をどのように位置づけ選択しているのかという「働く女性」（家族従業者）の現実を明らかにすることを課題に設定した。

この課題を考察するにあたり、本研究では、上で述べた小経営世帯に注目してきた民俗学における生業研究の成果を援用し、経営体の内外から女性の労働に影響を与える要因を指定した。経営体外から女性の労働に影響を与える要因としては、社会経済状況や旅館業界の動きのみならず、マスメディアによる影響についても分析を行うこととした。その一方で、経営体内における影響として、旅館業務だけではなく、生活のための労働や地域社会における労働との関連にも注目し、家族成員との業務・労働分担やその変動も踏まえた上で、女性の置かれた状況を考察することとした。

課題に適した分析対象として、本研究で取り上げたのが、経営者家族の一員として旅館業に従事する女性、いわゆる旅館のおかみである。これまでの観光学における先行研究では、旅館業は家族従業者を中心に業務が分担される小規模な経営組織で担われる点が特徴として挙げられている。そして、戦後、旅行の大衆化とともに、施設の大規模化・組織の合理化が進んだものの、経営体制はいまだ完全に企業化するには至っていない、小経営体から企業経営体への過渡期にあると位置づけられる。こうした旅館業の特徴を踏まえ、旅館のおかみは、属する経営体の変化に伴い家族従業者である女性の担う労働の変化を分析するに適していると考え、本研究における分析対象として選択した。

加えて、旅館のおかみについては、マスメディアによって特定の女性像が付与され、それが一般に「女将」イメージとして浸透していることが指摘されている。こうしたマスメディアにおける旅館のおかみに関するイメージは旅館に関わる人々が相互に影響を与え合い情報が伝達されるなかで

形成されたものであるだろう。おかみに注目することで、特定の職業に付与されたイメージが女性の働き方に対して与える影響や、女性の働き方の実態が新しくイメージを形成する様子を分析することが可能であると考えた点も旅館業に従事する女性を対象とした理由である。

第1章では、日本の近現代における観光産業や宿泊産業の変遷を、主に観光学領域の先行研究から概観した。

第2章では、雑誌・新聞記事に掲載された資料を手掛かりに、1980年代にマスメディアにおいて成立した、旅館のおかみに付与された「旅館を取り仕切る芯の強さを持つ女性で、宿泊客には細やかな気遣いを発揮する日本の伝統文化に素養のある女性」という「女将」イメージの形成過程について分析を行った。考察の結果、旅館のおかみに関するイメージは、近現代の日本の社会・経済状況や関連産業の変遷や、宿泊業界からおかみに寄せられた期待（「おかみ」イメージ）に影響を受けながら形成され、1980年代にマスメディアによって一般化したものであることが明らかとなった。さらに、そうしたイメージが一般に浸透していく過程でおかみ自身の反応が反映された結果、現在の旅館のおかみに関するイメージは、各おかみの実践も組み込んだ多様な内容となっていることを指摘した。

第3章では、各旅館の業態を、室数（収容客数）と最低宿泊料を指標として旅館の業態を分類し、おかみに関するイメージを浸透させるためにマスメディアに取り上げられた業態について考察を行った。その結果、第2章で資料とした雑誌記事に掲載されている旅館は、おかみに関するイメージを伝えるために意識的に選択されたもので、その時期の一般的な旅館の業態とは乖離していることが明らかとなった。

また、第3章では、おかみ側の視点から見た業務の認識と、自らに付与されたイメージに対してどのような対応をしたのかについても考察を加え、第2章で指摘した、1980年代に流布した旅館のおかみに関するイメージから、現代の、各個人の実践も組み込まれた多様なイメージへと変質した仕組みを明らかにした。その結果、おかみの業務は、旅館の経営形態や本人の価値観によって違いを見せており、イメージが業務内容に影響を与えていても、彼女たちが身近に接し日々経験していることから生み出されたものが、最も強く業務に反映されていることが明らかとなった。

第4章・第5章では、第2章・第3章で指摘したマスメディア上のおかみに関するイメージや、宿泊業界・関連業界の流れの中で、個別の地域を取り上げ、各地域の旅館のおかみたちの働き方がどのように形成されたのかについて考察を行った。

第4章では、島根県大田市温泉津町の旅館を対象に、宿泊・旅館業界からの影響や、マスメディアにおいて形成されたイメージが、経営者家族間の分担やおかみの働き方に与えた影響について明らかにした。温泉津地区では、戦前から1960年代頃まで旅館業は女の仕事とされ、おかみとベテランの女中が中心となって経営する形が一般的であった。しかし、1960年代以降、観光客の増加に応じて、経営者家族の男性が旅館業へ経営者として参入し、女性だけの判断で決定できる部分は縮小

された。そのうえ、板前の雇用によって、地域においておかみの仕事と考えられていた料理という業務も手放さざるを得なくなった。

そこで、温泉津地区の各旅館のおかみは、1960年代から1970年代にかけて宿泊業界からおかみに期待されたあり方を取り入れ新たに業務を創っていくことを選択した。ただし、経営規模が小さく経営者家族も一労働力として重要となる温泉津地区の旅館では、旅館のおかみに関するイメージを活かした接遇は重視されず、業務を管理する運営責任者としての役割が強く内面化されていた。つまり、イメージによる影響や宿泊・旅館業界による思惑や流行を取り入れる方法については、旅館の状況やおかみたちの感覚によって取捨選択がなされていたのである。

第5章では、静岡県伊豆市土肥地区を事例として、生活のための労働や地域社会との関わりも含めた労働の総体と、旅館業務との相互関連に焦点をあて、おかみたちの従事する旅館業務がどのように形成され変動しているのかについて明らかにした。おかみたちが旅館において従事している業務は、労働力、運営責任者、おかみとしての業務という3つの側面に分類できた。彼女たちは、旅館経営体における業務のみならず、家族成員の状況や、地域社会における経営者家族の位置づけ等にも規定されながら、旅館業、生活のための労働、地域社会における労働を、他の家族成員と分担しながら行っていた。

しかし、おかみたちは、周囲から受ける規定を全て受け入れて業務に従事しているわけではない。外的要因から自らの業務を規定される一方で、自分たちの判断や感覚を業務に反映させている。例えば、ある状況において旅館業務と、地域における労働や生活のための労働といった他次元における労働の優先順位を判断するなど、外部から得た知識や自らの経験をもとにその時の状況に合致したやり方を編み出している。その結果、おかみたちは、自らのおかみとしての生き方を創造しているのである。

以上、本論各章での検討を踏まえた結果、本研究における結論は以下のとおりである。

まず、近現代日本における旅館業について、各地域における状況や歴史を反映し運用されてきた旅館経営のあり方を凌駕する大きな文脈、つまり日本全体における経済状況や宿泊業・関連産業界からの影響が、旅館の経営者家族に押し寄せ、家族間の労働の分担や意味づけを不可逆的に変動させたことを明らかにした。各地域・各経営体で多様なあり方をしてきた経営体制が、上記のような変動を経た結果、現在、多く見られる経営者家族で経営業務を分担するという分業形態がとられることとなった。1つの家族内で経営業務を分担することにより、旅館業務はもちろん、生活のための労働や地域における労働等の様々な労働を含んだ労働の総体を、状況に応じながら家族で分担するという柔軟な役割分担が成立することとなったのである。日本の社会における旅館業という観点から見れば、この変化は、過去においては1つの家族を支える多くの「業」のうちの1つでしかなかった旅館業が、戦後の日本社会において旅行が大衆化したことに伴い、家族の生計を支える

主たる「業」を果たすまでに成長したということを示していると考えられる。

加えて、本研究では、前段で確認したとおり、社会経済状況や宿泊・関連業界の変動といった外的要因や、家族成員の状況の変化といった経営体の内部における要因によって、経営体内における役割分担、そしてその成員が果たす労働が影響を受けるのはもちろん、おかみとして働く女性たちは更にマスメディアにおけるイメージ形成と言う点において、経営体の外部から直接、影響を受ける存在であることを示した。前段で述べた経営体内外から受ける影響に比べると、イメージがおかみの働き方に与える影響は捉えにくい。イメージは少しずつ形成され、社会の中に浸透し一般に共有されることとなるが、そのこと自体が直接おかみたちに影響を与えるのではなく、おかみと接する第三者、宿泊客や旅行者、ともに旅館業を営む家族などといった人々をとおして顕現することによって影響を与える。

本研究では、旅館のおかみに関するイメージを、イメージの実現に期待を寄せる集団によって「女将」と「おかみ」の2つに分けて分析を行った。1980年代に一般化した「旅館を取り仕切る芯の強さを持つ女性で、宿泊客には細やかな気遣いを発揮する日本の伝統文化に素養のある女性」という「女将」は、宿泊客向けのイメージであり、そのイメージの元となったのが1970年代頃から旅館業界において重視された旅館経営体においても、そして「旅館らしさ」を演出する装置としての「おかみ」であった。おかみたちは、こうした宿泊客や旅館業界からの期待を受け、自らの属する旅館における役割とイメージ上のおかみの姿を関連付けながら業務に従事していた。

ただ、こうした経営体の内外からの影響をうける一方で、これらが女性たちの働き方の全てを決定づける要因とはならない点も、本研究での分析において明らかになった点である。特に、マスメディアにおけるイメージといった経営体外から受ける影響においては、外部から受けた影響をどの程度、自分の業務に反映させるかは女性自身の考え方や感覚によって判断されていたのである。つまり、おかみたちが、外部から与えられる影響を材料に繰り返した選択によって、結果的に彼女たちのおかみとしての生き方が創りあげられていると考えられる。

こうした、周囲から規定を受ける部分と、個人が自らの判断に応じて能動的に動いている部分が組み合わされ個人の生き方が形成されるという、「中途半端」な働き方を射程に入れる視点は、民俗学も含め、女性の労働に関する研究において十分に取り上げられてこなかった。本研究では、旅館業を対象に、女性が受動性と能動性の間を往復しながら小さな選択を繰り返し、自分の働き方を創造していく姿を提示したが、この視点は女性のみならず人々の働き方を考察するために、更に検証していく必要があるだろう。今後は、この両面を人々がどのように繰り返しながら生きているのか、そしてこの両面と人々の関わりの集積がどのように現代社会を創りあげたのかを考察していくことが重要な視角となると考える。